

蓮月の和歌にみる「ただごと歌」について

藤瀬 礼子

了徳寺大学・教養部

要旨

蓮月（1791-1877）は小澤蘆庵（1723-1801）の歌を学んだ。彼の提唱した「ただごと歌」は、まさに蓮月の平明な歌に影響している。蓮月は蘆庵の歌を暗記し、消息でそれを示しているほどである。かなり深くその歌論についても心に留めている様子が窺える。

蘆庵の「ただごと歌」とは、そもそもは紀貫之が『古今和歌集』仮名序において提唱した歌論の一つである。この「ただごと歌」の言葉を自らの歌論の柱として、二条派の伝統集団に抗うように、自論を展開したのが小澤蘆庵であった。蘆庵は、当時の国学者らが古今調を退け、万葉調を重んじた説に反し、あえて古今に依拠した「ただごと歌」をその主軸と据えた。

ただ言葉数を合わせて並べたのでは歌として成立しない。それが、時には散文のように身近でありながら、歌の風情を失わないのは、蓮月の歌の基礎に『古今集』などがあり、さらに当時において、歌の姿のありようを蘆庵の提唱する「ただごと歌」に求めているからにほかならない。

キーワード：蓮月、和歌、ただごと歌

Influences of Tadagoto-Uta in Rengetsu's Waka

Reiko Fujise

Department of Liberal Arts, Ryotokuji University

Abstract

Rengetsu (1791-1877) studied *waka* — tanka poetry — of a great 17th century poet Roan Ozawa (1723-1801). Influences from Ozawa's *tadagoto-uta* can be clearly seen in waka plainly written by Rengetsu. Rengetsu memorized Ozawa's waka — a fact that was noted even in news about Ozawa himself. She is also known to have been extremely mindful of his essays on tanka.

The term “tadagoto-uta” was first used in an essay on tanka in the preface of *Kokin Wakashu* by Tsurayuki Kino, a prominent poet in the Heian period (794-1185). The term then became a key concept in Ozawa's essays on tanka as Ozawa developed his own theories that defied the traditional Nijo poetic school. At the time, Japanese classical scholars rejected Kokin-style waka and respected the Manyo style. Ozawa rebelled against this trend, primarily writing tadagoto-uta influenced heavily by *Kokin Wakashu*.

A waka cannot be created by simply stringing words with the correct number of syllables together. Rengetsu's waka are at times as accessible as prose, while they still embody the necessary qualities for waka. It is based on inspirations such as *Kokin Wakashu*, and it is also clear that Rengetsu looked to Ozawa's tadagoto-uta for guidance on the form that her waka should take.

Keywords : Rengets, Waka (tanka poetry), tadagoto-uta

蓮月の和歌にみる「ただごと歌」について

藤瀬 礼子

はじめに

蓮月（一七九一—一八七七）の歌は、女性でありながら時に潔く、力強い。もちろん数ある歌であるから、女性的な古典的な和歌も少なくない。歯切れのよい旋律、一つの主題を単刀直入に言いおこせる技法は何に拠るものであろうか。蓮月が歌の勉強の対象としたのが小澤蘆庵（一七二三—一八〇一）である。彼の提唱した「ただごと歌」はまさに蓮月の歯切れのよい歌にほかならない。蓮月は蘆庵の歌を暗記し、消息でそれを示しているほど、かなり深くその歌論について心に留めている様子が窺える。そこで、ここでは蘆庵の「ただごと歌」に対する蓮月の理解と、蓮月の歌にみる「ただごと歌」について一考を加えることとする。

一、ただごと歌について

「ただごと歌」とはそもそもは紀貫之が『古今和歌集』仮名序において提唱した歌論の一つである。この「ただごと歌」の言葉を自らの歌論の柱として、二条派の伝統集団に抗うように、自論を展開したのが小澤蘆庵であった。また、当時の国学者らが古今集を退け、万葉調を重んじた説にも反し、あえて古今に依拠する「ただごと歌」をその主軸とした。ここではまず、蘆庵の依拠した『古今集』序の「ただごと歌」について見ることにする。多少紙面を割くが他との比較のため、必要な箇所を節録する。

そもそも歌の様六つなり。唐の詩にもかくぞあるべき。その六種の一つには、そへ歌。大鶴鶴の帝をそへ奉れる歌。

難波津に咲くや木の花冬ごもり今は春べと咲くや木の花

といへるなるべし。二つには、かぞへ歌。

咲く花に思ひつく身のあぢきなさ身にいたつきのいるも知らずて
といへるなるべし。

これは直言たうとにいひて、物に譬へなどもせぬものなり。この歌いかにいへるにかあらむ。その心、えがたし。五つに、ただごと歌といへるなむ、これにはかなふべき。

三つには、なずらへ歌。

君に今朝けさあしたの霜のおきていなば恋しきごとに消えやわたらむ
と言へるなるべし。

これは、ものにもなずらへて、それがやうになむあるとやうにいふなり。この歌、よくかなへりとも見えず。

たらちめの親のかふ蚕の繭こもりいぶせくもあるか妹に逢はずて
かやうなるや、これにはかなふべからむ。

四つには、たとへ歌。

わが恋はよむとも尽きじ荒磯海の浜の真砂はよみ尽くすとも
といへるなるべし。

これは、万の草木鳥獣につけて心を見するなり。この歌は、隠れたる所なむなき。されど、初めのそへ歌と同じやうなれば、すこし様を変へたるなるべし。

須磨の海人の塩焼く煙風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり

この歌などや、かなふべからむ

五つには、ただこと歌。

いつはりのなき世なりせばいかばかり人の言の葉うれしからまし
といへるなるべし。

これは、事のとのほり、ただしきをいふなり。この歌の心さらかなはず。とめ歌とや言ふべからむ。

山桜飽くまで色を見つるかな花散るべくも風吹かぬ世に

六つには、いはひ歌。

この殿はむべも富みけり三枝のみつばよつばに殿づくりせり
といへるなるべし。

これは、世をほめて神に告ぐるなり。この歌、いはひ歌とは見え
ずなむある。

春日野に若菜つみつ万世をいはふ心は神ぞ知るらむ

これらや、少しかなふべからむ。おほよそ六種に分れむことは、
えあるまじきことになむ⁽¹⁾。

以上のとおり「そへ歌」、「かぞへ歌」、「なずらへ歌」、「たとへ歌」、「た
だこと歌」、「いはひ歌」という六つの特徴に分類されている。真名序には
「歌の様六つなり。和歌有六義、一曰風、二曰賦、三曰比、四曰興、五曰雅、
六曰頌」とあり、「そへ歌」が風、「かぞへ歌」が賦、「なずらへ歌」が比、
「たとへ歌」が興、「ただこと歌」が雅、「いはひ歌」が頌に当たるとする。

この六つの分類は『詩経』の風雅頌賦比興の六義に由来している。『詩経』
の風雅頌は詩の性質や内容による分類、賦比興は詩の表現や修辭の観点か
らの分類である⁽²⁾。

「そへ歌」に引かれた「難波津に…」は、その歌で表面的に詠まれている
ことと直接関係のない裏の意味を相手に伝えようとした歌でここでは春
の訪れによって花が咲いたことを詠んで、その実、機を得て皇位に着くこ
とを意味する歌である⁽³⁾。「かぞへ歌」とは物の名前を羅列し、数えあげ
る歌、「咲く花に…」には「つぐみ」「あぢ」「たづ」などの鳥の名前が含
まれている。「なずらへ歌」とはその名のとおり何かになぞらえた歌、「た
とへ歌」とは草木・鳥獸に託して気持ちを表現する歌、「ただこと歌」と
は注によれば「いつはりのなき…」は求め歌程度であり、「山ざくらあく
まで色を見つるかな花散るべくも風吹かぬ世に」の歌を引いている。つま
り誰もが理解できる平明な歌と言つてよい。「いつはりのなき…」も抒情の
短歌で率直に気持ちを述べている点においてやはり「ただこと歌」であり、
「山ざくら…」も抒情であり、山桜を詠み込み自然を身近に感じて表現して

いるところなどは日本的である。そうした点で六義の雅とは照合するもの
と注では考えられたのであろうか。「いはひ歌」とは祝意のある歌、もしく
は天皇を讃える歌である。

『古今集』の序は当然『詩経』の六義を意識し、貫之時代の近年の歌を
批正し、理論的な枠組みを当てはめたものである。国ぶりが異なれば、文
化、風習、感性もそれぞれに固有のものをもっているために、右のような
詩の六義が、わが国の和歌にまったく同じ意味合いで適合することはない。
だが、それぞれに近似した特性を読み取り分類したことが窺える。

江戸時代、国学が台頭するや万葉主義を主張する学派が現れたが、それ
でも『古今集』というのは歌よみにとっては学ぶべき歌の亀鑑であったと
いつてよい。そして、『古今集』序にあるように近き歌を憂いて人麻呂を恋
い慕うように、言葉の遊び、レトリックに過ぎた心ない歌に対する蘆庵の
嘆きが、『古今集』序に掲げられた「ただこと歌」に向けられたと考えら
れる。ここで時代的な倒錯がなされているといえる。心を和歌に託してい
た古今時代⁽⁴⁾への蘆庵の憧憬が、他の五つの分類よりもとりわけ卓越し
た論であったと感じさせたのであろう。

二、蓮月の学んだ蘆庵の歌

蓮月の歌の師匠が誰であったかということは諸説言われているところ
である。蓮月と同じ時代に生きた人で香川景樹（一七六八—一八四三）や六
人部是香（一七九八—一八六四）などの名が挙がる。とくに香川景樹は当
代きつての大歌人であり、これにどれほど手ほどきを受け、また入門した
のかは今後の詳細な研究を待たねばならない。しかしながら香川は蘆庵の
門下にあつたのであるから少なからぬ影響を受けている。ただ、村上忠順
（一八二一—一八八四）宛の手紙には、

いにし水無月十日あまり二日にいだし玉ひし御文、此れう月半ばか
りに、香川うしのみもとよりとてもてきたるを、思ひがけぬものから、

おのが名を書付玉ひしかば、とりてみ侍るに、いさぎよき御みづぐきのあとなるを、あやうこぞよりことしまで、いづこによどみつらんと、うちかたぶきながら、ひらきつつみもてゆくに、きらきらしき御文のさまよ、玉をつらねしとはかかるをやいふらん、光まばゆく、匂ひむせぶ心ちして、いみじうめでたければ、てもはなちがたくてなん、くりかへし、をがみまつりぬ⁽⁵⁾。

とある。「香川うし」というのは香川景樹である。去年の六月十二日に出された手紙が、今年の四月の中ごろに手元に來たのをなぜか不思議に思いつつも、その筆跡を見て大変よろこんだようすがここから窺える。村上忠順を介しての香川景樹との繋がりか、または青木木米（一七六七—一八三三）の娘である三輪貞信尼（一七九八—一八七二）との関係からか、いずれにしてもこの村上への手紙に分かるように、いまをときめく香川氏からの手紙にいたく感激していることが分かる。この後に「いとど一度みたいめも玉はらばやと、おもふ心はすすみぬれど、老くづほれて侍れば。はるけき道をまゐりこんこともかなひ侍らず。」⁽⁶⁾しているところから見ても、この時点においては、それほど親交は深くないと推察できる。

実際に蓮月がどのような歌を詠みたかったのか、また歌はどうあるべきか、歌の本質を考え、その歌の理想としたのが、近くはやはり小澤蘆庵であつたことは間違いない。すでに蘆庵は亡くなつてゐたために、彼の歌集を手ずから写し学んだことは、蓮月の歌に大いに影響をもたらしたといえる⁽⁶⁾。

また、蓮月が大阪天満の竜興寺道休和尚に宛てた消息には

此間は御弟子様御いで被下、あつらへものも何もでき不申。ろあん先生の歌もたしかにうつしさし上度と存、とみ岡と申もののかたにもつてゐると存候所、此人わかさへ行かへり不申、かれこれおそくなり、まづ覚え候だけ書付申候。

として、次の十四首をしたためている。

- ① ことのはは人の心の声なればおもひをのぶる外なかりけり
- ② 安からん大路はゆかて岩ねふみさかしき道にまどふよの人
- ③ 岩ねふみからたち分けてゆく人は安き大路を過がてにする
- ④ ことのはのしげみこちたみ分かねてまどはばかへれもときつる道
- ⑤ いにしへにかへらんことはみな人のもとの心の道の一すぢ
- ⑥ すなほなる心ことばはいにしへにかへらん道のすがたなりけり
- ⑦ 鳥すらもおもひのあればこそかたみにねをば鳴かはしけれ
- ⑧ おもふこといはでやまめや心なき草木も風にこゑたてつなり
- ⑨ 一ふしとおもふやがてすなほなる心のゆがむはじめなりけり（ならましか）

⑩ ひたすらにいひてゆけばことのはのよしとあしとはみづからぞしる
⑪ たちよりてくめばにごらぬ水もなしよそめのみこそ清くみえけれ
⑫ いかに斗はらだちさわぎうらみましみのとしなみを人のよせなば
⑬ いかにばかりいひちらすともことのはの花をおもはばみはなかるべし
⑭ 更ぬとてかかげそへずばのこるよの猶くらからんまどのともし火

蓮月は、この十四首の和歌を記憶してしたのであるから、蘆庵の歌風をいかに摂取しようとしたか蓮月の努力と意思が窺える。些か、ここに掲げた十四首について見てみる。これらの歌は、ほとんどが、蘆庵の歌論に基づく和歌である。これを道休和尚に伝えたものではなだらうか。そして、道休和尚もこうした歌論的内容の和歌、すなわち和歌の進むべき道しるべを求めていたのであらう。蓮月はまず覚えただけを書くとはしてゐるものの、和歌のあるべき姿を示したかったに違いない。そうでなければ花鳥風月を詠んだもう少し気分の明るい、景色の美しい歌をしたためても差し支えなかったはずである。和歌を研究すること、本質を理解したいという姿勢がここから読み取ることができる。

①「ことのは……」は古今集序の冒頭「やまと歌は人の心を種としてよろづの言の葉とぞなれりける」を想起させる和歌であり、蘆庵の歌の態度を

よく表しているものである。④「ことのはの…」⑤「いにしへに…」⑥「すなほなる…」は内容が共通しており、「もときつる道」「もとの心の道の一すぢ」「いにしへにかへらん道」というように、「いにしへ」に帰すことが和歌の本来の心であると考えている歌である。当時の歌は修辭に勤しみ、肝心な心というものが欠けていると蘆庵は考え、また蓮月もこれに賛同したのである。「すなほなる心ことば」こそが「いにしへ」に存在した大本の心であるという認識である。⑦「鳥すらも…」はまさに歌に心が存在しなければならぬという根本が示されている。鳥でさえ、草木でさえも(⑧「おもふこと…」)思うことがありそれを表現するのに、思うことを述べなければその誠実な心も見えないものとなってしまふ。⑬「いかばかりいひちらすとも…」もそれと同じことを詠ったもので、言葉巧みに詠み散らしてもそこには心がないといって、言葉だけは大げさで心のない歌を揶揄したものであろう。⑨「一ふしと…」もこれと同様である。⑩「ひたすらにいひてゆけばことのはのよしとあしとはみづからぞしる」は、歌らしく「よし」「あし」「みづ」と縁語をとりいれながら、調子のいい歌である。和歌の道を追究していけばその良し悪しを理解することができると和歌に対する一意専心、また求道的精神が存在している。②「安からん…」③「岩ねふみ」も歌の道がそう安易なものでないことを歌っている。蓮月は「かのうしの心のままに。うち思ふまをよみいで玉ひしかば、近き人の、おもしろきなど申やうには侍らず」と書しており、心のままに詠むことが大切であるという蘆庵の歌論を学んでいる。ここに示した歌は、蘆庵の歌に対する考え、彼の歌論にもとづくものを引いており、蓮月もそれをいかに肝に銘じていたのかを窺わせるものである。

とりわけて蓮月がこの消息において第一に書き記したこの歌こそは、蘆庵の提唱する「ただごと歌」(⑧)の象徴である。「ことのは」すなわち和歌はまさしく人の心の声であるから、思い、感興を歌うことが、何よりも重要である。これが理知に走って技巧に苦心するようになると心という純粹

な感情が表れてこないと考えたのではないだろうか。およそ日本人は完美すぎるものよりも些か崩れたものに心引かれる傾向にあるようである。器一つにしても形の完全に整っているものよりも、バランスのくずれたものに対して愛着を感じるようである。完美でないものに人間性、味わいを見出すのである。稚なるものは純粹性を感じ、端的な分かりやすい正直さを感じる。歌において見れば、そうした感情の発露を見出すべきであり、技巧を争うものであつてはならないのである。けつして下手でよいということではなく、つねに「ことのは」の世界に鍛錬していくことで自然と心のこもった良い歌が詠めるようになるというのが、蓮月が蘆庵から得た「ただごと歌」の精神である。

三、蓮月のただごと歌の考察

古今集が例示した「いつはりのなき世なりせばいかばかり人の言の葉うれしからまし」の「ただごと歌」は、観念的であり比喩を用いずに分かりやすいものである。先に見た蓮月が手紙に摘録した蘆庵の歌も観念をそのものずばり詠んだものも少なくない。叙景の中に心を含ませる和歌の基本的な詠みぶりの歌にも、平易に飾り気なく詠んだ歌も多い。

山ざとは松のこゑのみ聞なれて風ふかぬ日はさびしかりけり

これも情景が浮かんでくるほどの率直平明な歌で、結句の「さびしかりけり」に感情が集約されている。自然の中に生活を営み、精神的な孤独を自然の発する音にいかにも慰められていたのが分かる歌である。

一方で「ただごと歌」と認められる中には芯が太く、率直で男性的な強さを感じさせるものがある。蓮月は女性でありながら、そうした歌を折りに触れ詠んでいる。

敷島のやまとごころはあめつちにつらぬきてこそてりわたりけめ

右は彦根藩西村有年の消息に「君のただしき御仁政のほどを、みなみながらがたり候よし…」のあとに書せられた歌である。まさに氣骨があり、

男子の歌のようである。「敷島のゝつらぬきてこそ」までが一気に詠み上げられ、「てりわたりけめ」で考えを著した歯切れのよい歌である。

蓮月が長崎へ遊学する富岡鉄斎（一八三六—一九二四）に送った手紙に歌を附している。

もろこしの月のかつらの一本もをりもてかへれわが家づとに

当時の長崎は外国の文化の入り口であり、最先端を吸収する場所であった。そこに可愛がってやまない鉄斎を送り出すのであるから、その援助する気持ちと些かの寂しさがこめられている。下の句「をりもてかへれわが家づとに」はその帰りを待ちわびる気持ちが如実に表されている。これも歯切れのよい力づよい歌である。

また、「世の中もめでたくをさまり、有がたき事ども承り、日々悦老後のよろこび此上なき事と存上候。」と幕末の混乱が一落ち着きしたときにも鉄斎宛の手紙に付している。

世の中のちりもにぎりもながれては清きにかへるかもの川水

鉄斎の父の十三回忌の折にも

なきかげもうれしとみらんたち花の花かくはしき君が手向を

と詠んでいる。これには「六月四日」の日付がある。父維叙が亡くなったのは、安政三年（一八五六）であるから、十三回忌のころは鉄斎は、三十三歳である。前年には円山派の画家中島華陽（一八一二—一八七七）の娘の多津と結婚し、十三回忌の年、明治元年（一八六八）の八月には長女が生れる^⑦。鉄斎も三十歳を過ぎてやつと学者として世間に認められるようになり、家庭も持ったため、「なきかげもうれしとみらん」と言ったのである。この歌は倒置法によってまとめられているが、感情をそのまま詠んでおり、なんら難しい技巧はされていない。ほかには挽歌にも「ただごと歌」が見られ、悲しみに遭遇したときの率直な感情をが詠まれている。また消息の中において、歌をしたためているのは村上忠順宛のものに少なくない。

いかでとは思ひながらも老ぬればふじもみずてやはりはてなん
いくつねて春ぞとをりしおよびみのかがまるとしのくれかな
うきもせずしづみもはてずながらへてとし波高くなりけるかな

としをへておもひしかみの宮ばしら君がめぐみにをがみつるかな

富士山を一度見てみたいという思いが蓮月にはあったようで、歌にもその気持ちが詠まれている。また老いの心境を淡々と詠んでいる。「うきもせずしづみもはてずながらへて」は心痛を経験した末にこれを俯瞰した境地にあつてか下の句がこれを受けてその年を重ねてきた人生がじつに感慨深く詠まれている。「としをへて」は村上忠順に対する感謝の気持ちを表した歌である。いずれも分かりやすく率直に気持ちが詠い込まれている。

蓮月は歌を介して、心の交歓をした人であるが、歌のある手紙がいくつかある。

手紙において歌を附したくなる人にしか歌は詠まれないことが分かる。歌に本心を吐露している。また感興が極まったとき手紙に歌をしたためているのだらう。たとえば、親しい人などが亡くなったときにそれを慰めるために歌を記している。

手紙の内容は主にお礼やお願いななど事務的なものである。その本来の性質上、要件だけを書くことは当然のことであるが、さらに和歌をあえて附して、和歌における贈答の役割を消息において行っていることが分かる。

それだけに、そのときどきの感慨を正直に歌にしており、消息にある歌は「ただごと歌」の特性をよく具えているといえる。

おわりに

歌とは心に感じるものがあつて、言葉にそれを託するものであるから、何かのきっかけにこうした率直な歌が詠まれるのは至極自然なことである。平明な言葉で素直に詠むというのは存外難しいものである。ただ言葉数を合わせて並べたのでは歌として成立しない。それが、以上見たように、時

には散文のように身近でありながら、歌の風情を失わないのは、蓮月の歌の基礎に『古今集』などがあり、さらに現代にあつて歌の姿のありようを蘆庵の提唱する「ただごと歌」に求めているからにはかららない。蓮月の歌のリズムは暗記した然るべき歌によつて構築されている。

平成二十六年十一月十三日 稿

注

(1) 『古今和歌集』日本古典文学全集(小学館 一九八一年五月十日) 参照。

(2) 『中国学芸大事典』(大修館書店 一九七八年十月二十日) に、風は諸国の民謡、雅は天子が諸侯を集め、公卿を饗するときのうたで、朝廷の楽師によつて編成され演奏されたものである。頌は宗廟祭祀のときの楽歌である。一方、賦はその事を直叙するのいい、比は物に比方しているのいい、興は事を物に託していることが説明されている。

(3) 『古今和歌集』日本古典文学全集(小学館 一九八一年五月十日) の注を参照。

(4) 藤原定家は『近代秀歌』において「昔、貫之、歌の心巧みに、たけ及び難く、詞強く、姿おもしろきさまを好みて、余情妖艶の躰をよまず。それより、このかた、その流を承くるともがら、ひとへにこの姿におもむく。ただし、世下り人の心劣りて、たけも及ばず、詞も賤しくなりゆく。いはむや近き世の人は、ただ思ひ得たる風情を三十字に言ひ続けむことをさきとして、さらに姿詞の趣を知らず。」(『歌論集』日本古典文学全集 小学館 一九七五年四月三十日) と述べ、『古今集』を代表する貫之の心の表現について評価をしている。

(5) 『蓮月尼全集』(村上素道篇 思文閣出版 二〇〇六年九月二十五日) 消息篇参照。以下、引用の消息はこれに拠る。

(6) 蓮月の手紙に拠れば、小澤蘆庵の歌を学んでいたことは確かである。村上忠順あて蓮月消息に蘆庵を勉強したことが記してある。「ことしも

夏ごろより涼しきかたにとて、大仏のうちにうつろひものし侍りてなん。ここに小沢蘆庵ぬしのものし玉ひし文ども、宮の御蔵にこめ玉ひしを、いかでみてしがなと年ごろ思ひわたりしを、こたびこの寺のりしの君にとかくたばかりものして。いとみそかにかくれてみ侍ることなん侍る」また与謝野鉄幹も小澤蘆庵に蓮月が学んだことを述べている。「尼の歌は初め小沢蘆庵に私淑して、後は自然なる読み振りとなり給へる由、之も父の語りき。また尼は『源氏』と『枕の草紙』を若き日によく読まれた人なりと父の云ひき。」(『蓮月尼全集』) とある。小澤蘆庵に私淑したということである。実際に会って手ほどきを受けたことはなかったにしても、蘆庵の和歌を手本とし、考えを学んだことに相違ない。

(7) 小高根太郎『富岡鉄斎』(吉川弘文館 一九八五年十一月一日) 参照。

(8) 齋藤茂吉は、『近世歌人評伝』(岩波文学講座『日本文学』一九三二年四月十五日)において、蘆庵について無技巧派、自然流露派であり、心をよく説いている。その心とは、まじりけのない自然の心、自分の心という意味であるということ述べている。

査読終了年月日 平成二十六年十二月十二日